１．私たちは、移住・定住促進に係る先進地である島根県海士町の視察を行ってきました。

結論から言いますと、海士町（行政）の取組というより、住民１人１人が自分のやれること、やりたいことを楽しみ、実践することが出来るプロ集団の住む町（島）でした。

２．島根県海士町は、日本海の島根半島沖合約６０Km に浮かぶ隠岐諸島４つの有人島の一つです。

３．島後水道で「島前（どうぜん)」、「島後（どうご)」と分けられ、島前３島のうち中ノ島を「海士町」といい１島１町の町となっております。

本土からの移動手段は、高速船かフェリーしかなく、約２～３時間かかるほか、冬場は季節風が強く吹き荒れ、欠航し孤島化することも珍しくない外界離島のハンディキャップの大きい島です。

しかし、対馬暖流の影響を受けた豊かな海と、名水百選に選ばれた豊富な湧水に恵まれ、自給自足のできる半農半漁の島となっております。

４．昭和 25 年ごろは 7000 人いた人口も平成２２年には 2300 人ほどとなり、高齢化率 39%、高校卒業後ほとんどが島外へ流出し 20～30 歳代の活力人口が低く、出生数も年に 10 人前後でした。

５.離島振興法など国の経済対策に呼応した公共事業への投資で港の整備など社会資本は整備されましたが、その一方で地方債は平成 13 年度末には約 101.5 億以上に膨らむ結果となりました。

６．こちらが海士町の現町長である山内町長です。地縁・血縁を否定した町民の選択として、本人は海士町出身であるものの、親の代で海士町に移住したという、山内町長が平成 14 年に当選しました。

山内町長は、役場を「住民総合サービス株式会社」と位置づけ、「地域経営」は「企業経営」と同じという観点から役場職員の意識改革を行います。

具体的には、年功序列を廃止し、適材適所主義とするとともに、組織を現場主義に再編し、職員が地域を変える意識になることを目指しました。

７．平成 15 年の、平成の大合併で海士町でも合併話がありましたが離島が合併してもメリットがないと判断し、単独町制の道を決断しました。

しかし、「三位一体の改革」いわゆる「地財ショック」が襲い、町税にも匹敵する地方交付税は大幅に削減され、平成 20 年度には「財政再建団体」へ転落の危機が予測され島の存続さえも危うい緊急事態に直面しました。

そこで、平成 16 年 3 月に住民代表と町議会、行政が生き残りをかけた攻めと守りの「海士町自立促進プラン」を策定します。

8．まず、「守り」とは徹底した財政改革であるとして、平成 16 年度、町長は「自ら身を削らない改革は支持されない」という信念のもと給与カットを宣言すると、管理職も続いてカットを申し出ました。

町長以下助役、教育長、管理職そして議会から始まった給与カットでしたが、それに続くように、職員組合からも自主カットの申し出があり結果的に２億円の人件費削減効果ができました。その一部は「子育て支援」や産業振興に充て、目に見える施策を展開していきました。

その他、職員数・議員定数の削減など組織のスリム化と連携強化で現場主義の改革を行ったことで住民からは、バス料金の値上げや補助金の返上の申し出に加え寄付も届けられるようになるなど、町の取り組みを知った町民と危機感を共有化したことで住民意識も大きく変革しました。

9．そして「攻め」の戦略として、地域資源を活かし、第１次産業の再生で島に産業を創り、島に人や雇用の場を増やし、外貨（島外からのお金）を獲得して島を活性することを掲げました。

そして観光と定住対策を担う「交流促進課」、第１次産業の振興を図る「地産地商課」、新たな産業の創出を考える「産業創出課」の産業３課を設置し、この産業３課を役場ではなく、たとえば誰が何を買うかなど直接顔を合わせて見聞きしたり、ニーズを肌で感じることができるようにと情報発信基地であり、町の玄関口でもある港に併設しました。

10. また、島には景観のほかなにもない、ないなら作るしかないということで、島まるごとブランド化へ取り組みました。平成 10 年度より町独自で募集していた商品開発研修生制度（現在の地域おこし協力隊のような制度）で「さざえカレー」の商品開発を行いました。

海士町では肉が貴重だったため、たくさん採れるサザエを当たり前のようにカレーに入れて食べていました。これは商品価値があると気付かなかったものも外からみると魅力的に映るいい例となりました。

また、島のハーブティーでもある「ふくぎ茶」を商品化し、障害者施設での製造

を行い、障がい者の自立支援と地域ビジネスを展開することで、作業所の賃金を3倍にすることに成功しました。

11. こちらは島のブランドかきの春香といいます。種苗（しゅびょう）の生産から育成・販売まで一貫生産を目指し、Uターン・Iターン者と地元漁師が協力し、この「隠岐海士のいわがき・春香（はるか）」の養殖に成功しました。また、Iターンの方によって築地市場への出荷や消費者への直接販売などの販路を確保し、漁業者所得の向上に貢献しました。

この養殖は現在17名のIターン者の雇用の場となっております。

春香は、春から初夏限定の「いわがき」であり、独自の厳しい管理基準、安全強化基準をクリアしたものしか出荷しないことから、築地市場や首都圏のオイスターバーで大ヒットしています。

12. こちらは島のブランド牛の隠岐牛です。もともと繁殖生産し島外の肥育業者に販売していた隠岐牛を、島内で肥育まで一貫し生産することでブランド力を高め、ました。繁殖と肥育の両方の生産をすることで安定した収入が見込め、また雇用の場の創出にもつながると考え、本力はあるものの、公共事業の減少が進む建設業経営者が参入し、ブランド化を目指した取り組みを行ってきました。

現在1か月12頭を東京へ出荷していますが、近く倍の24頭出荷するため、体制を整備しているところです。

13. こちらは磁場エネルギーで細胞を振動させることで、細胞組織を壊すことなく凍結させることができるCAS（キャス）システムです。平成17年3月より稼働しました。離島のハンデをこの凍結システムが補い、先述のイワガキ、イカなど流通ハンデを一気に克服し、近年では中国・アメリカなどの海外市場への輸出拡大も始まっています。

14. こちらは海士の塩です。昔ながらの塩炊きの塩づくりを復活させようと島民有志の動きから本格的な事業となりました。「海士御塩司所（あまおんしおつかさどころ）」という歴史に相応しい名前の施設を運営し、島の歴史文化的背景も表現しながら、塩の製造販売ならびに加工商品の商品化に携わっています。

15. 漁業者とIターン者が新しく事業を起こし、町と漁協は漁業所得の向上と若手漁師の育成につなげようと、支援のための農林水産物処理施設を整備し、高級食材である干しナマコの製造から輸出販売までを手掛けています。

16. マルチワーカー。観光協会が派遣業の免許を取得し、春はイワガキ、夏は観光ガイド、秋はイカ、冬はナマコといった単独では通年雇用が難しいものの、仕事を組み合わせて通年雇用を確保する「島のマルチワーカー」という雇用形態を構築しました。

17. 海士町の今後としてさらなる成長を見据え、海藻に着眼し、現在、ヒロメ・マコンブの養殖、ツルアラメ、アカモクなどの海藻を町と大学、企業で共同研究しております。

18. 唯一の高校を使った島留学制度などその他紹介しきれなかった事例が数多くありますが、成功事例でなくどれも挑戦事例だという言葉がとても印象に残っております。

19. こちらのポスターは、海士町の PR ポスターです。
東京などお金を払えばなんでも与えられる社会ではなく、知恵をひねりだし考えだすことで楽しさが生まれてくるという意味が込められたものとなっております。お話しを伺った方は「米、魚、肉、野菜など生きるために必要なものは海士にある。その他ないものはないと受け入れ、またないからこそ考える楽しみがある」と仰っていました。

20. 地域で暮らすことは、働くと住むがしっかりしていなければ成り立ちません。地域を楽しみ、考えながら自分たちができることを各々が他人をあてにせず自分でやる。このスパイラルを楽しむことで好循環が生まれてきます。
移住者など募集するのにも具体的な仕事を用意した上で募集することが重要と仰っており、例えばイワガキならイワガキで新規就業者募集と明確に募集し応募してきた方を選べばいいため、移住者側も自分のやることが明確なため来やすくなります。
サザエカレーの場合は、当初は海士っ娘（あまっこ）募集と銘打って参加者を募ったところ 3 人の応募があり、サザエカレーの開発をしました。その後、「商品開発研究生募集」と I ターン雑誌で募集をかけたところ 100 人の応募があったそうです。

21. 街づくりのための３つの必要なものとして、仲間づくり、仕組みづくり、金づくりでありこれらが回れば町の活性化につながります。
海士町は、たしかに移動等不便ですし、店なども多くありません。

それでも若者が集まる理由は自分の持つ明確なやりたい事（目標）に向かって活躍できる場が用意されているからだと感じました。たとえば今回お話しいただいた方は、漁業者募集や海士の食材を使った料理人学校創設に向けたプロジェクトで海士に来た人たちでした。

　また、ないから考える、そしてやりたいと思ったことはやり遂げようとする町の方の強い意志も町づくりに非常に大きな力になっていると思いました。

22. 先ほどの内容に付随し普代で１年以上生活したぼくから伝えたい事があります。
よく住民のみなさんから普代を盛り上げてくれ。住んでくれと期待を込めていわれます。
それはそれでうれしいことですが、ぼくとしてはそこまでお人よしではありませんし、一人でできることなんて高（たか）が知れているためこのまま現状のようであれば普代を離れると思います。
ぼくはそれなりの覚悟のうえで普代にきました。自分が選んできたことに関しては責任もって生きていきます。
ですが、普代の方はどうでしょうか？
外部の人間が定住しようとし仕事あったとしても住む場所がない。
海士町では、町が空き家を買い取りリフォーム後提供するというやれることを徹底的に自分でやってました。
いまの普代の様な状況で人を呼んでも意味がないと思います。
ぼくは、地域おこし協力隊という名前で来ていますが、ぼくは自分が普代におこされている感が強く日々感謝してます。
地域おこしも大事なんでしょうけど今普代に住んでいる皆さんが普代の生活を楽しまなければいま現状で地域おこしをしても意味がないと思ってます。
だからこそもっとぼくを巻き込んでほしい。
そしたらぼくは普代の事を深く知れます。嫌なこともあるかもしれませんし見せたくない所もあるかもしれません。
でもそこを見なければぼくは普代で生きようとおもいませんし、生きていけません。
こちらの言葉のようにまず意識を変えてみてぼくの行動にアンテナ張っていてください。
そしてなにかピンときたらがっついてきてください。
ぼくが普代で生きていくかどうか考えるのはそれからです。
普代で生きているのは皆さんそれぞれ自分で選んでいること。だったらいろいろ言い訳せず楽しむ方がいいに決まってるじゃないですか。
お互い普代を楽しんでいきましょう。